

夢 塾 だ よ り

～ 隠れた能力を引き出すこと ～

(第49号) 令和3年8月24日



教育 (Education) は、動詞が「EDUCATE」で語源はラテン語の「EDUCATUS」。「E」は「外へ」を表す接頭語で「DUCERE」は「導く」という意味ですから、「能力を引き出す」ことが「教育」ということになります。そうすると教育者の仕事は「能力を引き出すこと」になります。

これまで約40年、たくさんの子供たちと接してきて、教育の原点に立ち返ったとき、私は生徒の能力を引き出すことに成功したのだろうか?と自問します。その確率はかなり低いものになっています。ただ、中にはその人の持てる能力を引き出せたかもしれないと思える生徒もいることが、これからもこの仕事を続けていける心の支えとなっていることは確かです。

生涯学習の時代になりましたが、日本では未だ「6・3・3」教育が主流で大学の4月入学もまだ変えていません。今朝の新聞で「教員免許10年更新制度」が廃止になったとの朗報がありました。国の指導者が変われば教育政策も変わるのはしかたのないことですが、いつの時代にあっても、教育の普遍性と不変性は変えてはいけない大切なものです。教育者の使命も「生徒の能力・才能を引き出し導く」という普遍的で尊いものだと思います。

仕事から、生徒の親御さんから手紙やショートメールをいただくことがよくあります。どの親御さんもわが子を限りなく深く愛しておられて、子供の成長のためにいかなる労力も惜しみません。その親の気持ちを素直に感じ、自分に甘えない生徒はおのずとその能力が引き出しやすい環境にあります。親の気持ちを思いやれず、すべてに甘えてしまう生徒の能力は引き出しにくい状況にあります。そうすると教育の成否のカギは「生徒の能力を引き出す」教師の力と、「親の気持ちを咀嚼する」生徒の心との掛け算ということになります。どちらかが「ゼロ」ならどんなに力をいれようが「ゼロ」になります。ですから親の仕事は子供に親である自分の気持ちを自然に無理なく「すーっと」わからせてやる必要があります。



そうすればオリンピックのように必ず成果(聖火)は現れます。

「凡庸な教師はただしゃべる。良い教師は説明する。すぐれた教師は自らやってみせる。偉大な教師は心に火をつける」(ウィリアム・アーサー・ワード)